

2018 年度科学基礎論学会例会ワークショップ

Post-Kant 論理哲学：ドイツ観念論・Lotze・現象学

オーガナイザ 岡本賢吾（首都大）

提題者 太田匡洋（京都大）

浅野将秀（首都大）

長坂真澄（群馬県立女子大）

本ワークショップは、2016 年度科学基礎論学会例会で行われたワークショップ「カントの論理思想の現代性－19 世紀論理哲学再考 I」の成果をさらに進展させることを目指している。しかし、直接に取り上げる内容はそこから独立しているので、新たに参加される方々ももちろん大歓迎である。

カントが提示した一般論理学、さらに超越論的論理学（その基盤を成すカテゴリー論・図式論など）について、カント自身のテキストの解釈を行うにとどめるのではなく、その理論的・技術的な内実の再構成や一般化を行い、これらの体系が現代的な観点から見て、なぜ、どのような仕方で重要な意義を持つと言えるかを明確にすること。——前回のワークショップの関心は、基本的にこのような点にあり、その結果について言えば、オーガナイザの理解では、もちろん未だまったくの素描にとどまるとはいえ、その基礎の一端を築くことには成功したのではないかと考えている。以下の本学会ウェブページを参照されたい。

http://phsc.jp/dat/rsm/20161025_05.pdf http://phsc.jp/dat/rsm/20161025_06.pdf

http://phsc.jp/dat/rsm/20161025_07.pdf http://phsc.jp/dat/rsm/20161025_08.pdf

ところで今回は、以上を踏まえた上で、むしろコンプリメンタリーな方向、つまり、問題の歴史的な側面に考察を向けることとしたい。例えば、論理と数学の超越論的基礎づけをめぐるカントの所説は、ポスト・カント期の重要な哲学者たちにおいてどのように受け継がれ、さらに展開されたのか。また、それはいかなる点で本質的に批判され、新たな見解によって取って代わられたのか。——こうした問題を近年の文献研究を踏まえながら可能な範囲で精確に明らかにすることが、今回の目標である。

一般に、このような課題に取り組むことの哲学的興味とはどのようなものだろうか。もちろん、哲学にとって、その歴史的展開の在り様を知ることは現在を理解する上で不可欠な手段の一つであり、その有意義さは論じるまでもないとも言えようが、他方で、文字通りの「歴史的回顧」といったものについては、直ちにそこに哲学的な啓発性を認めるわけにいかないことも確かである。では、どのような観点に立ち、どのような問題意識やコンセプトを導入することで、ポスト・カント論理哲学の史的展開を「啓発的」に読み解くことが可能になるのか。今回提題して下さる 3 人の研究者はいずれも、オーガナイザの見るところでは、それぞれ独自の仕方でこの問題に対して有望な回答を与えているように思われる。本ワークシ

ヨップが企画されたのは、このような理由からである。

これ以上の詳細は、もちろん各提題者にお任せすべきであるが、予め全体の構図を見やすくするためにもう一言だけ補足を行っておこう。

太田氏の提題の基本的主題は、**J・F・フリース**（1773-1843）である。フリースは、教科書的な哲学史では「ドイツ観念論」期の（最中心ではないとしても）逸することのできない特徴ある思想家の一人としてしばしば言及されるものの、現代の科学哲学や論理学・数学の哲学ではその認知度は決して高くない。だが、20世紀初頭の一人の新カント派哲学者**L・ネルゾン**（1882-1927）——彼は多様な哲学的活動を展開したが、中でもフリース哲学の復興に献身的に注力したことで知られる——への関心が、近年、様々な理由から高まる中、科学哲学の世界でもフリースの存在が一挙にクローズアップされることになった。というのも、第一に、ネルゾンの周囲にはヒルベルト、ベルナイス、フッサールらがおり（ゲッティンゲンでの同僚）、特に前二者は、ネルゾンを介して論理学・数学の哲学におけるフリースの所説から決定的な影響を受け、第二に、こうしたネルゾンを介するフリースの影響は、さらに論理実証主義者、特にライヘンバッハらのベルリン派、またポパーにも強く及んでいることが明らかになったからである。例えば、ヒルベルト・プログラムの背景に伺われる認識論の精確な内実を見極めることの困難さはよく知られているが、この点だけからしても、フリースの所説を適切に解釈し、再構成することの現代的重要性は明らかであろう。

浅野氏の提題では、**H・ロツツェ**（1817-1881）が取り上げられる。ロツツェの所説が19世紀半ば以降、論理学の哲学全般（フレーゲ、ラッセル、新カント派、現象学派など）にきわめて大きな影響を与えたことはよく知られており、彼の名が没却されたのは高々この半世紀間だけのことである。曾於意味で、近年の彼の再評価は当然でしかないが、より詳細に彼の論理学説、特に「概念」論が、現代の意味理論的な観点から見て、例えばフレーゲの所説に勝るとも劣らない洞察と射程を持つという事実は、まだまだ知られていないと思われる。今回のワークショップを通じて、ロツツェの論理哲学のアクチュアリティが再認知されるようになるならば、それはこのワークショップ自体の意義をも高めるであろう。

長坂氏の提題では、**E・フッサール**（1859-1938）の所説、あるいはむしろ、それを踏まえて精力的に展開されている現代フランスの現象学者リシールの所説が取り上げられる。現代の論理学・数学の哲学の観点から見ると、フッサールはある種“真価を見定めにくい”存在である。一方で彼が、初期の『算術の哲学』以来、論理学・数学の基礎について一貫して強い関心を持ち、一定の独自性ある哲学を展開したことは誰もが知っている。さらに、彼のそうした所説が直観主義者ブラウワーの考えと興味ある親近性を持つこと、また、（ことによるとそれとは矛盾して）ゲーデルによってある種のプラトニズム的観点から深い共感を寄せられていたことなど、諸々の興味ある事実も近年では常識に属する。だが、フッサールの考えを適切に具現した論理的・数学的な基礎理論といったものがあるのかと問えば、

（オーガナイザの知見の及ぶ限りのことではあるが）皆無であるし、もっと一般的な認識論的理説のレベルで考えても、特有にフッサールのと言いうるような方法論的原理（構成主義の原則のような）やプログラム（ゲーデルが集合論に対して、あるいはLawvereがトポス論に対して提起したような）は見当たらない。そうした中、事の成否は別として、リシールは、フッサールの思索を踏まえつつ、さらにカントの所説をも遡って援用しつつ、デデキンント・フレーゲに見られる実在論的な古典算術・解析学に対する踏み込んだ批判を展開している。これがきわめてアクチュアルな興味に満ちた試みであることは明らかであろう。